ポリグラフ

岡本俊弥

到着便のあと、入国審査場までの手順は聞いていたとおりだった。
それでも、何ともいえない不安を感じる。シー・トゥ・ナインは顔をしかめる。
八時間近くのフライトの後だ。早めに終わってほしい。
来日は初めてだ。国によって入国手続きはさまざまだった。トラブルがないわけではないが、それほど長引いた経験はない。
空港は機械化が進んでいる。
人間の審査官が聞き取りをするゲートはなくなり、高速の自動化ゲートだけが並ぶようになった。古い空港に比べ、新しい設備の審査場面積は半分ほどだろうか。昔あった指紋による認証手続き自体がもうない。だから早いのだ。

ビザを免除された一部の国だけでなく、どこの入国者であっても例外なく機械ゲートが使える。自動で読み取られるので、パスポートを開く必要もない。仕組みはよく分からないが、簡単すぎてセキュリティに問題ないのかと、不審に思うことさえある。

ゲートにはディスプレイが置かれ、中性的な顔立ちのオペレータが写っていた。リアルというより、アニメ風にデフォルメされている。

「渡航目的は」

聞き慣れた質問だ。

「観光です」

「目的地は」

「……京都です」

「最寄り空港ではありませんね」

「便が……ありませんでした。鉄道で移動します」

ゲートのバーが開くのを待っていると、声が淡々と告げる。

「別室で詳しくお話を聞かせてください」

「え、でも」
「別室で詳しくお話を聞かせてください」

＊

初めて榊原喬子と出会ったのは、訴訟関係の打ち合わせのときだったと思う。
顧客会社の顧問弁護士が、事実関係を確認するためのヒアリングに招集されたのだ。それも会議の途中に呼び出されるので、どういう訴訟なのか内容までは分からない。事前の参考人招致というわけだ。
弁護グループの中に榊原喬子はいた。
弁護士事務所の代表が、数名の部下とともに出席していた。
喬子はその中では一番若く見えた。年の割に古風な名前だな、とぼくは思った。
場所は六法全書が並ぶ会議室だ。
「弁護士の事務所にある、金文字の六法全書なんてインテリアですよ。今どき紙を読

む人なんかいない」

そう誰かから聞いたことがある。

頻繁ではないが、弁護士が同席する打ち合わせに出ることはある。知財権侵害に絡んだり、損害賠償に絡んだり、そういう訴訟を伴う事件なら珍しくはない。専門的な事実をかみ砕いて説明する役割は、本来なら顧客自身がすべきなのだが、機械の不具合となると難しい時もある。

榊原喬子は、打ち合わせの内容をその場で箇条書きにしていた。ぼくの説明を機械サポートなしで細大漏らさず記録する様子に、ちょっと感心した憶えがある。今どきの会議では、たいてい機械が議事録を作成する。機械は単に文字起しをするのではなく、論点を抽出し分かりやすくまとめてくれる。ただ、機械は忖度しない。重要な会議ほど、後で手直しの手間がかかる。顧問弁護士は、融通の利かない機械要約を嫌ったのかもしれない。

それはそうだろう。人間にはオフレコにしたい発言がある。あからさまにしたくないことがあるのだ。

あれから何年か経った。
再度受け取った名刺に、事務所の名前はなかった。
「お辞めになったのですか」
「ええ、今は独立しています」
名刺にはＮＰＯ法人の名称が記されていた。
「ご依頼の主体はＮＰＯですか」
「はい、この件はわたしが担当します」
依頼人が非営利団体の弁護士というケースは、少なくともぼくにとっては初めてだった。
「ウィスパー・トーカーはご存じですね」
榊原喬子はすぐに本題に入った。
「セキュリティ装置ですね」
「はい、主に警備関係で使われています。さすがに街中では見かけませんが、業種によってはポピュラーな製品です」

「使われ方については詳しくありません」
「ただ、楳木さんはバグには詳しいはずですよね。この機械の犯しうる誤りについては」
そうだ。あの会議、顧問弁護士が出ていた会議は、新海神電気 New Wadatsumi Electronics が顧客だった。会社としては中堅、ニッチではあるが専門的な製品のメーカーだ。ウィスパー・トーカーは主力製品だった。
ぼくは怪訝な顔をしたかもしれない。
「御社に守秘義務があることは承知しております」
榊原弁護士は、声を潜めて言った。
分かっているのか。
ＮＷＥ、新海神電気は、公的機関向けの認証装置ではトップだった。国益に関わるクローズドな市場だ。いくら性能やコストに優れていても、海外メーカは予め排除される。使われるのは、主に官公庁、警察、自衛隊などの軍関係が多いと聞いている。その装置がらみで、解析を請け負ったことはある。とはいえ、仕事の中身に関して守

秘義務があるのは当たり前だ。
「だとすると、どのようなご用件になるのでしょうか。お話しできないかもしれませんが」
「誤検知ですよ、初めてお目にかかった会議でも、楳木さんが解説してくれたじゃないですか」

＊

一昔前に、ポリグラフという装置があった。心拍数や呼吸数、皮膚表面の電圧など、ある種のバイタルサインを収集して記録し、被験者の心理的な変化を見つけ出す装置だ。使い方は単純で、あらかじめ用意された質問票を読み上げていき、常に「はい」と肯定するか、あるいは常に「いいえ」と否定して、信号をプロットするペンの変化を読み取る。訓練された技師や警官が、被験者が嘘偽を話しているかどうかを判定するのだ。

そう、これが最初期の検知装置なのである。

前世紀の初め頃アメリカで発明されたポリグラフは、世紀末には一大産業となった。機密を扱う政府関係の部署では日常的に使用され、民間企業の採用試験や、警察の取り調べでも使われた。真実を見抜く魔法の装置と思われた。

警察ではポリグラフを重視する傾向があった。被疑者が罪状を否認していても、虚偽判定ができれば、自白と同等の効果が得られるからだ。だが、心理学者を中心に疑義が唱えられ、使用は制限されるようになる。

単純なバイタルサインは、被験者の心理状態によって大きく左右される。不安や恐怖心があると反応する。しかし、不安は虚偽の有無ではなく、取り調べ自体に対する恐れかもしれない。原理が知られてから、心拍数程度ならコントロールできる者も現れた。これでは、科学的な客観性があるとはいえない。二〇世紀の終わりには、被疑者側の同意などの制約条件をクリアできなければ、裁判の証拠に使えなくなった。

二一世紀、この技術は別の形態で復活する。

ニューラルネットワークによる表情検知である。顔は本人の意図と関係なく、微細

に変化する。虚偽の発言を行ったとき、顔色や表面温度が変わるのではないか。顔を細かなグリッドに分割し、区画ごとの変化をニューラルネットワークで学習させれば、高精度で判定が可能だと考えたのだ。

いまの機械は、大量の深層学習を根拠に、かつてない精度で虚偽を見破れると称している。少なくとも、メーカーはそうプロモーションする。

そしてまた、必要とされる分野も増えた。

「ウィスパー・トーカーが、もっとも使われているのは入管です」

「入国管理局、空港ですかね」

「ＮＷＥの製品が使われているのは国内だけではありませんが、少なくとも空港での事例が多い」

「そこで問題が起こっているのですか」

「これが導入されてから、入管の作業は大幅に省力化されました。その代わり誤検知も増えた」

「この場合の誤検知というのは」

「虚偽の申し立てをして入国しようとした、と誤認識するのです」
「その後で人間の確認もするんでしょう」
「確かに、入管の審査官が判断します。ただ、残念ながらウィスパー・トーカーの判定を優先します。彼らは機械の方が正確だと考えていますからね。覆ることはまずありません」
「誤判定されたらどうなるのですか」
「入国拒否、強制送還となります」
「強制送還となると大事ですね。でも、そういう一般的な傾向を、バグだと証明するのは難しい。何がバグで何が正解か、解釈の問題になりますからね」
「一般論で無理だというのは理解しています」
榊原弁護士は意外なことを言った。
「今回お願いするのは、そのうちの一件だけなのです」

*

「榊原さんは人権派の弁護士だ。今は国内に住む外国人の人権保護で活動している。ＮＰＯ自体の肩入れもしているみたいだな」
　ボスはぼくとの会話の中で、そう教えてくれた。社会活動に関心はないのかと思っていたが、意外なことに、ＮＰＯ活動の支援、寄付もしているのだという。場違いな依頼の契機はそんなところにあった。
「結構大変な仕事ですね。大手事務所に勤めていれば安泰だったろうに」
「まあそうだけど、弁護士が安泰だったのは過去の話だぜ」
　国がロースクールを多くの大学に設け、仕事のない弁護士を大量生産してから、ずいぶん社会的状況が変わった。博士課程を増設し、博士を大量に養成したのと同じ構図だ。もともと、産業が高度化すると企業での博士需要は増える、同時に訴訟社会になれば企業でも弁護士需要が高まる、という思惑があった。ただし、国は人材の育成まではするが、雇用には関知しない。職場提供は受益者が行えばいいと、民間に丸投げした。

しかし、日本の経済は停滞する。需要の拡大など全く起こらなかった。企業の基礎研究所は人員を減らし、国内で企業訴訟が増えることもなかった。以来、日本での博士や弁護士の価値は下がった。資格を持っていても就職は難しいのだ。

「弁護士も省力化が進んでいますからね。書類仕事が多いし、調査能力とかになると、機械の方が人を雇うより早い」

「第二の失業の波だな」

「でも、企業はともかく、外国人労働者を巡るトラブルは増えてますね」

「この国では永住資格の取得は、相変わらず簡単じゃない。大半の労働者は五年しか働けない。何十万人もが、毎年入れ替わる。生活が安定しないわけだから、不法滞在とかのもめ事は当然増える」

「榊原さんは、なぜそういう仕事をしてるんですか。ボランティアじゃないんでしょう」

ボスは一呼吸置いて話した。

「国籍は日本人だが、移民二世らしいな」

「弁護士自身がですか。親が外国人には見えませんね」
「いま国内には、永住権のない労働者が五百万人もいる。外国人も多種多様だからな。外見だけで分かる方と思う方が間違ってる。言葉が問題なけりゃ、そもそも気にも止めないだろう」
「たしかに、日本生まれで日本国籍なら日本人だ。区別する方がおかしいですね」
仕事柄、外国籍の顧客と話をすることは多い。日系メーカだからといって、日本人が主流とは限らない。そう考えると、外国系の日本人であっても違和感がないのは当然だろう。

＊

端末に写真が表示されている。
「シー・トゥ・ナイン、ミャンマー人です」
榊原喬子は顔を指し示しながら言った。

「観光ビザはあったのですが、目的を偽って、入国しようとしたと判断されています」
「収容されているのですか」
「難民申請とかではない限り、入国審査の段階では収容はされません。残念ながら、即決の強制送還で帰国しています」
「裁判とかはないんですね」
「不服申し立ては、その場で却下されています。勘違いする人が多いのですが、入管は外国人の権利保護をする組織ではありません。入管が守るのは自国民の利益です。実害を及ぼす犯罪者や、自国民の雇用を奪う不法就労者をスクリーニングするのが目的ですからね。そのためには、外国人の権利など優先されません」
「どこでもですか」
「アメリカを見たらよく分かる。中南米から非合法に入境する外国人を、親子生き別れになっても排除する。法的に問題ない、それだけが基準ですからね。まあ、メディアが騒ぐと表だっては控えますが、それは反省したからではなく世論に迎合しただけです。そこで必要なのは正確な判定ではなく、過剰であってもネガティヴなものを通

さないフィルタなんです」
「しかし、審判の決着がついてしまっているのですね。今からできることはあるのですか」
「一度強制送還されると、少なくとも五年間は入国ができなくなります。五年は彼にとっては長い。処置の取り消しを申し立てたいのです」
「シーさんですか、この人は何をしに来日したんですか」
「まだ留学ビザは下りていませんが、彼は大学に入学して、弁護士を目指す予定だったのです。そのための準備も進めてきました」
「なるほど。とりあえず観光ビザで入ろうとしたときに、不法就労と見なされたと」
よく見ると、写真と榊原弁護士は風貌が似ているようだった。思っただけなのだが、つい口に出た。
「失礼ですが、榊原さんと関係があるのでしょうか」
「ええ、彼は私の弟なのです。ああ、それからミャンマー人の名前は省略しない、シー・トゥ・ナイン三音で一つの名前なのですよ」

躊躇なく認めると、笑顔を見せた。
労働力を外国人に頼る国なのに、いまでも外国人が永住権を得たり帰化できるまでには、たくさんの障害がある。
榊原喬子の両親は地方の工場で働いていた。
日本の製造業は二〇世紀の末頃から、ライン労働者の多くを外国人に頼るようになった。当時は、自動車産業で南米の日系人を使っていると話題になったが、実態は製造業全般がそうだった。国籍はどんどん変わっていく。南米諸国、中国、フィリピン、ベトナム、ミャンマー、まあ安い労働者を求めてきたわけだ。
ただ残念なことに、勤めた工場は正規の手続きを踏んでいなかった。在留期限を越えて労働をさせた。不法滞在というわけだ。摘発されてから長い間収容所に入って、あげくは国外退去処分を受けた。
喬子は、両親が日本で生活しているときに生まれた子だ。小学校も満足には行けなかったが、幸い就学支援グループの中に、養子を受け入れてくれる日本人がいた。両親もいま故国に戻るより、その方がいいと考えた。

「日本国籍を取って日本名に変え、勉強をして豊かになれ。そう言ったらしいですが、私は憶えていませんよ。大人になってから、日本人の親から聞きました」

喬子は、笑いながら言った。

＊

人が他人の嘘を見抜くのは難しい。

ものの研究によると、人間は一日平均二つの嘘を吐くらしい。嘘と言っても、深刻なものもあれば、悪意のない、他愛ないものもあるだろう。咄嗟に嘘を吐くのだ。ところが、逆に嘘だと分かる割合は二〇パーセントに満たない。人はカジュアルに嘘を吐き、一方、相手の吐く嘘はほとんど見破れない。

一般的に知られる嘘のサイン、例えば目が落ち着かないなどの動作には、科学的な根拠がない。嘘を見抜けたと思っても、たいていは偶然に過ぎないのだ。尋問などの訓練を受けたプロでさえ、相手の嘘を見破れる確率は五分、つまりサイコロの偶数奇

数の確率と変わらないのである。
そういう人間のいい加減さに比べれば、ウィスパー・トーカーは優れているのだろう。内部資料では、八割の確率で真偽を判定できるようだった。
「これ以上となると、ＥＥＧやｆＭＲＩと組み合わせないと無理だ。ただそれだと、実験設備みたいな装置が必要になる。センサをつけたヘッドギアもいる。現場に置くんだから、現実的とはいえない。まあ、今ぐらいが限度だと思うな」
ＮＷＥの知人はそんな説明をしてくれた。
だとしても二割もの割合で誤りが生じるとなると問題がある。警察の取り調べや、裁判の証拠に使われるべきではない。
榊原喬子は、入管で使われたウィスパー・トーカーの判定データを入手していた。機械判定に対するクレームは、モノにもよるが社会問題となりがちだ。裁判ともなれば、判定根拠の明示が必要になる。公的な機械についても同様で、疑義が生じた場合、データの開示を求めることができる。
ただそこには学習の元となったデータベースや、細かな補正アルゴリズムは含まれ

ない。通常の製品に付けられるモデルカードもない。これは機械の判定精度や学習方法を記載した、いわゆる仕様書に相当するものだ。データだけで「なぜ」の答えを得るのは困難だった。訴訟で生かせるケースは限られるのだ。

開示されたデータには、グリッドで区切られた顔の温度変化が記録されている。ウィスパー・トーカーが被疑者に向けて定型の質問をする。被疑者は答えるが、その声は判定材料とならない。根拠となる変化は、グリッド単位の皮膚表面温度で示される。

顔には表情筋などさまざまな筋肉がある。それが微少に動くことで、表面温度は（これも微少だが）変化する。もちろん、温度変化と真偽の判定に相関関係があるのか、ぼくには分からない。機械が特定のパターンを捉えて、判定したことだけは分かる。

目視では無理なので、手持ちの画像相関器と組み合わせてみた。すると、予想しないパターンが見つかった。

これは嘘なのか。

＊

「シー・トゥ・ナインさんとは、何度かお会いになったのですか」
「ミャンマーで会いました」
「いつ頃でしょう」
「来日の半年前ですかね」
「とすると最近ですね。それまでは」
「……実の両親とは、長らく音信が途絶えていたのです。国外退去になって数年は連絡があったらしいのですが、その後は。私が大学に入るまで、両親もその件は伏せていました。あまり良くない状況だったので」
　国内の民族紛争で、政治的に混乱していた時期なのだろう。
「ではなぜ」
「事務所から独立するきっかけは、外国人に対する人権侵害があまりに多かったからです。私は日本人ですが、彼らの血を引いている。無視するには心苦しかった。企業訴訟の専門家といえるほど、長く事務所にいたわけでもありませんしね。別のＮＰＯ

を支援する目的で、何度かミャンマーには行っています。現地にもＮＰＯがありますから。そこで、偶然ですが、弟がいると分かったのです。面会したのはそのときが初めてです」
「弟だと分かったのは」
「両親の写真を持っていました。墓も教えてくれました」
「亡くなられていたわけですね」
「ええ、残念ながらそうでした。でも、もう十数年も前のことです。悔しいことですが、私は生みの親のことはほとんど憶えていません。実感がないのです。弟は親戚に育てられたと言っていました」
「シー・トゥ・ナインさんは何を希望していたのですか」
「最初にお話ししたように、日本への留学です。ただそれには資金が足りないので、援助を求めていました」
「今回の来日の目的は」
「一度来てみたいという本人の希望です」

「就学ビザがとれる見通しはあったのですか」
榊原喬子は口をつぐむ。
「……日本語がしゃべれないので、まず語学学校に通うところからですが、そこは前例があります。でも、そういうことじゃありませんよね。楳木さんは何を気にしておられるんですか」
今度はぼくが一瞬黙り込む。
「シー・トゥ・ナインさんがリジェクトされた理由が分かったからです」
「え、良かったじゃないですか。だったら、なぜすぐに」
「騙そうとしていたんですよ」
「どういう、意味でしょう」
「彼は機械を騙そうとした、それも露骨な方法で。榊原さんもお聞きになったことはあるでしょう。ある特定のパターンを見せると、機械は誤認識をする」
機械には、人間が判読できないパターンが見える。同様に、人間には間違いようのないパターンが、機械には別のものに見えることがある。それは、機械のバグなので

ある。シー・トゥ・ナインの顔には、赤外線でだけ見えるパターンが描かれていたのだ。
「パターンは偶然できたものではありません。意図的に騙そうとした。ところが、ウィスパー・トーカーはバグを回避できるバージョンだったため、彼が意図したようには動かなかった。ただ嘘を吐いている、というアラートは出た。審査官はその中身までは理解できなかったので、身元確認もせずに入国拒否、国外退去処分としたわけです」
「それは……、自分で仕組んだのでしょうか」
「いや、個人の犯行ではないと思います。機械のセキュリティホールを突くような犯罪は、グループでないとできない」
「いったい誰が」
　ぼくは黙って、ミャンマーがＩＣＰＯに提出しているレッドノーティスを表示した。何人もの顔写真の中にシー・トゥ・ナインの顔があった。次に赤外線パターンを書き加えた映像でシミュレーションすると、顔は印象の異なる別のものに変わる。

つい数ヶ月前までなら、入管はこのパターンを持つ入国者を通過させていた。ミャンマーのシステムは、まだ対応できていないのだ。入管のウィスパー・トーカーは違法なパターンには反応したものの、犯罪者情報とのリンクが不正確だったのかもしれない。

日本は相変わらず諸外国と犯人引き渡し条約を結んでいない。そもそもＩＣＰＯの国際手配リストは各国が自由に出せる。載っているからといって、他の国で逮捕する義務はないのだ。せいぜい入国拒否ができれば十分と考えているのだろう。

「手配書の罪名は騒擾罪ですが、政治的な理由があることも」

榊原喬子はしばらく黙っていた。

「何も言ってくれませんでしたね」

「もし、分かっていたら何かできましたか」

「いや」

また沈黙が降りた。

「言ってくれれば、対応方法もあったかもしれません。でも、初めて会う姉を信用で

きなかった……騙されていたのは、私だったわけですね」